

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885024

研究課題名(和文)戦後日本の社会通信教育の変容過程と機能に関する研究- へだたり の誕生と終焉

研究課題名(英文)A Study of the Process and Function of Distance Education for Adults in Post-War Japan: Beginning and End of Distance

研究代表者

古壕 典洋(KOBORI, Norihiro)

東京大学・教育学研究科(研究院)・助教

研究者番号：50735644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後日本の社会通信教育の変容過程と機能について、教育者と学習者間の「へだたり」に注目することで、文字のコミュニケーションによる学びのあり方を検討することを目的とする。研究の結果、社会通信教育におけるコミュニケーションは意味生成の過程であること、「へだたり」を学びの障壁として捉える分析枠組みは妥当ではないこと、「へだたり」は教育者の不在ゆえの遍在をもたらすこと、「へだたり」は想像力を介した学びの動態を可視化すること、の4点が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research is the subject of process and function of distance education for adults in post-war Japan. we analyze for learning by the written language of communication by focusing on the distance between educators and learners. The results of Research tried to clarify the following issues; 1. Communication of distance education for adults is a process of calculating the meaning, 2. Framework to capture as a barrier to learn the distance is not reasonable, 3. Distance leads to a resident of educators for educators of absence, 4. Distance is expose the dynamics of learning through the imagination.

研究分野：社会教育学・生涯学習論

キーワード：通信教育 社会通信教育 へだたり メディア コミュニケーション 文字 想像力 学び

## 1. 研究開始当初の背景

近年の再帰的近代化の進展やテクノロジーの急速な進歩は、知の形式が画一的な知的資源の学校を介した分配や所有から、自己の選好に基づく資源の組み換えという生成や循環へと変容したことを意味しており、私たちと時間・空間との関係のあり方に再考を迫っている。今日のeラーニングやMOOC(ムーク)などの教育・学習形態の隆盛は、こうした事態を象徴的に物語っている。

それゆえいま問われるべきは、個人が多様な時間・空間を生きながらも、それでいて相互に多層的に関係を取り結ぶことで知が生成される学びのあり方である。近年の知の形式の変容と時間・空間の多様性に鑑みれば、従来の「対面」という場における学びとは別様の学びを探究する必要がある。すなわち、教室のような均質な時間・空間の下での声のコミュニケーションのみではなく、対面を前提としない主体同士の文字のコミュニケーションによる学びの構想が要請されている。

## 2. 研究の目的

このような背景の下、本研究では戦後日本の社会通信教育の変容過程と機能について、教育者と学習者間の「へだたり」に注目して分析することで、文字のコミュニケーションによる学びのあり方を検討することを目的とする。

具体的には、国が主導しかつ面接授業・指導を行わない形態として社会通信教育が制度化＝「へだたり」の誕生した戦後直後から、テクノロジーの成熟や主体の複数化が叫ばれ「へだたり」の終焉が語られるゼロ年代(2000～2009年)までを対象とし、「へだたり」が総体としていかに捕捉され、そこでの学びがいかなるものであったのかを考察する。

社会通信教育とは、学校教育法が規定する高校・大学通信教育を除き、「通信の方法により一定の教育計画の下に、教材、補助教材等を受講者に送付し、これに基づき、設問解答、添削指導、質疑応答等を行う教育」である(社会教育法第50条第1項)。

この社会通信教育に関する研究は僅かだが蓄積されている。例えば社会通信教育は「陶冶と教化の中間形態」とする形態論的考察(藤岡英雄「通信教育の可能性:遠隔教育論的アプローチ」『教育学研究』47巻4号,1980。)教育方法と学習者の自由についての方法論的考察(白石克己『生涯学習と通信教育』玉川大学出版部,1990。)社会通信教育は学習者の意志を加熱させつつ冷却する役割を持つとする機能論的考察(佐藤卓己・井上義和編『ラーニング・アロン:通信教育のメディア学』新曜社,2008。)がある。

ここでの問題は、従来の研究が社会通信教育への核心的な問いに対して回答を提示できていないことである。すなわち、「なぜ社会通信教育は学びの自由を雄弁に語る一方

で、自身の教育・学習行為の真正性に対する社会的疑惑(社会通信教育は本物の教育ではないのではないか)を招いてしまうのか。そこでの学びの自由とは何を意味するのか」という教育学的意義への回答である。

本研究は「へだたり」に照準し社会通信教育の変容過程と機能を考察することで、上記への回答を提示する。そこで社会通信教育を構成する(1)メディア、(2)学習者と教育者はどのような関係にあり、(3)「へだたり」をいかに捉えるのかという研究課題を整理することが必要となる。

### (1) メディア

近年のメディア論の知見(ニクラス・ルーマン『社会システム理論(上)』佐藤勉監訳,恒星社厚生閣,1984。)によれば、送り手の意図はコミュニケーションにとって付随的なものであり、意味の同定は受け手の理解に依存する(たとえ何気ない意図的でないあくびですら、受け手によって「侮辱」を指し示す伝達様式と理解されればコミュニケーションが成立してしまう)とされる。

したがってコミュニケーションの考察は、情報内容よりも伝達様式＝メディアにこそ注目し、そこでのメディアは意図を伝達する透明な媒体ではなく、間主体的な意味生成の場として捉え直す必要がある。そもそも、「言語」というメディアは差異の構造(語ることと示すことの差異)を有する他者身体との間に生起する社会的なものであるが、本研究が照準する文字言語は、送り手と受け手の時間的差異を前提とするものであるため、メディアの差異の構造やそこでの間主体的な意味生成の過程をより明確に顕現させる作用を持つといえるだろう。

### (2) 学習者と教育者

このようにメディアを間主観的な意味生成の場として捉え直すならば、そこでの学習者は、教材のような書物の形態の物質的变化によって身体性の変容を被り、一人で書物を読みそれを解釈しようという態度でテキスト消費に臨む解釈的主体として規定できる。この解釈的主体としての学習者像は、視る読書(黙読) - 解釈をし、書くことで自らの内面へと指向すると同時に自己表現を行う近代的個人像と重なり合う(ロジェ・シャルチエ『読書の文化史:テキスト・書物・読解』福井憲彦訳,新曜社,1992。)

同様に教育者は、教材を介して一方的に学習者に知を伝達する者ではなく、学習者のレポートに応答する解釈的主体として捉え直される。

### (3) へだたり

ここから、教育を教育者の意図と学習者の自由の差異の現象として、今井の言葉を借りれば、教育を意味規準と行為のあいだにあるものとしてみるができる(今井康雄『メ

ディアの教育学:「教育」再定義のために』東京大学出版会,2004) によって本研究では、へだたりを「非対面的な主体同士の文字言語による意味規準と行為のあいだにあるもの」として捉える。

### 3. 研究の方法

本研究では、へだたりを社会通信教育における知と主体との関係において三期に分けて捉えることで、戦後日本の社会通信教育の変容過程と機能を総体として考察し、文字言語による学びのあり方に検討を加える。

具体的には、へだたりの誕生期(戦後直後~50年代)、へだたりの展開期(60~70年代)、へだたりの終焉期(80~ゼロ年代)に分け、そこでの学びの動態を「読み書きという教育的実践そのものが自己探求である」とする社会通信教育の信念との関係で捉えようとする。この関係の解明は、「自己を表現する私(真正性の次元)/正しく書く私(客観性の次元)/他者に応答する私(社会性の次元)」の三要素に着目し、政策文書、教材、学習指導書、レポート、雑誌記事等を用いた通史的考察によってなされる。

極度の貧困と圧倒的な社会的格差に象徴される戦後~50年代の社会にあって、平等の理念の下で自己探求を志向する社会通信教育は、日本社会の自由と平等の夢と重ねられる形で語られた。社会通信教育は主に農村労働者への実用知(ラジオ講座、電気講座)を提供することで、都市と農村の教育格差の縮小、地方改良や労働運動の基盤整備に寄与した。

このへだたりの誕生期における学びは、「苦学する私が(真正性の次元)/困窮する農村で(客観性の次元)/将来を展望する(社会性の次元)」という三要素が統一的連関を持って表現された時代でもあった。

こうした社会通信教育の成立は、為政者による教育者と学習者間のへだたりの発見によるが、このへだたりは「学びの自由」と「学びにおける身体性の不在」の両義性を有するため、それを内包する社会通信教育は構造的矛盾を抱えた教育・学習形態であった。この構造的矛盾の解消は、学習者が「諸制約ゆえの学習困難者」ではなく「忍耐強い志操堅固な者」とされ、教育者と学習者は「父」と「息子」という純化した人格的關係に置き直されるかたちで、学習主体に求められた。ここにおいて、社会通信教育は学習主体に回帰する教育であるという構造的な問題が明らかとなったが、この事態の背後には「声=自然/文字=技術」という前者の后者への価値の優越を示す二分法の下で、主体間の直接的身体的接触に真正な学びをみる近代的志向性の存在が指摘できる。

この構図下ではへだたりを学びの障壁としてのみ解釈するため、へだたりにおける文字を介した学びは必然的に看過されてしまうのである(拙稿「社会通信教育にお

ける『へだたり』に関する考察:生成期の議論に注目して」『日本社会教育学会紀要』48巻,2012,pp.11-20. 拙稿「初期遠隔教育論における“distance”の意義:形態論から行為論への転換過程に注目して」『日本通信教育学会研究論集』2013,pp.1-14. )。

以上のように、申請者はこれまでにへだたりの誕生期に関する考察を行ってきたことから、本研究では特にへだたりの展開期(平成26年度)、へだたりの終焉期(平成27年度)に焦点を当て考察を行う。

### 4. 研究成果

#### (1)平成26年度

農村型から都市型へと変質し、社会の単一化が進行する高度経済成長期での社会通信教育は、主に一般社会人への「技術知」(生産講座、経営講座)を提供しながら、人びとへ新たな知識獲得の機会を開く一方で、企業内教育や職業再教育と結びつくことによって選別・序列化の機能をも担った。

人びとの自由や平等の理念の下に誕生した社会通信教育は、企業の「改善=効率」的訓練の要請や労働者の階層上昇の欲望の受け皿となることで、自身の知を「地方改良の知」から「現場改善の知」へと変質させることになる(佐藤卓己・井上義和編,前掲書.)。

このへだたりの展開期における学びは、「働く私が(真正性の次元)/求められる学習内容を学び(客観性の次元)/喜びと忍耐を語る(社会性の次元)」と表現されたが、真正性の次元(生活感情)が客観性の次元(正しい知識)のいずれかが強調されることで、他要素との整合が崩れることとなった。すなわち、読み書きという教育的実践を客観性の次元で推し進めれば真正性の次元が失われ、真正性の次元で推し進めれば客観性の次元が失われていくという、学習者を取り巻く社会的な教育的な条件の変化である。

ここで問うべきは、メディア受容者の意識的・無意識的視点から見た、社会通信教育の知の変質と学びにおける整合性の崩れとの関係である。すなわち、学習者は「現場改善の知」として提示されたものを表面的には受け入れつつ、自らの真正性の次元(生活感情)に近接した要素のみを選択的に享受しあるいは別様に解釈をするという「横流し戦略」をとる(広田照幸『陸軍将校の教育社会史:立身出世と天皇制』世織書房,1997.)。

したがって、そこで措定された教育者像と学習者像に基づきながら、へだたりの解釈の多義性をつぶさに記述することで、こうしたメディアが受容される場での知の読み替えの様子を明らかにすることが課題として提示できる。

#### (2)平成27年度

社会が成熟し差異やコードを消費する価値多元的社会における社会通信教育は、文脈依存的で身体感覚に根ざした言わば「ローカ

ルな知」(趣味、環境問題、地域づくり)をあらゆる人びとへ提供することで、地域活動を通しての自己の再構築を志向している。しかし、この時代はテクノロジーの成熟や主体の複数化が叫ばれ、へだたり の終焉が語られる時代でもある。そこでは無数の学習方法や機会が存在するなかで、文字によるコミュニケーションの教育的意義が薄れ、社会通信教育が自身の存在意義を見出せずにいる様子が浮き彫りとなった。

この事態を象徴するかのように、へだたり の終焉期における学びは、もはや具体例の提示が困難なほどに三要素が互いに乖離し、主体の統一的表現を断念しているように見える。そこでは自己を表現する私(真正性の次元)、正しく書く私(客観性の次元)、他者に応答する私(社会性の次元)の三者へと私が乖離していくのに応じて、主体も複数化していく現象が考察される。

以上の、社会通信教育における知と主体との関係において捉えたへだたり の変遷は、社会構造の変容による「読み書きという教育的実践をする私」を支えていた生活世界の外部の消失と、近代社会に特有の反復的な自己像(書く自己と書かれる自己の同一性)の失効が関係していると考えられる。それと同時に、このへだたり の変遷は、文字言語というメディアが、個人と世界の間を不透明にしか媒介し得ないことを再確認させてくれる契機でもある。

それゆえここでの課題は、教育者の意図と学習者の自由との差異として現われるへだたり が、解釈的主体である学習者と教育者によっていかに意味づけされたのか、そして世界を構成する概念化・身体化された力である想像力を駆使して、学習者はいかなる学びを展開していたのか、以上の考察を通して、自己を対他関係において組み換え続けるような、想像力を介した自己生成のプロセスとしての学びとはいかなるものであるのかを明らかにすることである。

以上の研究成果は次の4点にまとめることができる。

社会通信教育におけるコミュニケーションは、教材を介した教育者から学習者への一方向的な知の伝達ではなく、身体活動を伴った解釈的主体同士の意味生成の過程として捉え直される。

従来のような、教育者と学習者間のへだたり を学びの障壁と解釈する態度の背後には、「声=自然/文字=技術」という前者の后者への価値の優越を示す二分法の下で、主体同士の身体的接触に真正な学びをみる近代的志向性の存在が指摘できる。

へだたり の存在は、従来の均質的空間や直接的時間のなかに、多層的な学びの時間・空間が見出されたことを意味する。それゆえ、へだたり は教育者と学習者を「一対多」関係へと構成するが、その物理的距離ゆえに、学習者は自己に固有な時間・空間下

において自由に想像力を駆使することで、「一対一」の関係(私だけの先生)へと組み換えることができる。つまり、学びにおけるへだたり は、教育者の不在であるがゆえの教育者の遍在をもたらす。

へだたり は、従来看過されてきた、こうした自己を対他関係において組み換え続けるような、想像力を介した自己生成のプロセスとしての学びの動態を可視化する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

古壕典洋、通信教育を捉える視座とは - 「へだたり」の再定位、佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集、第 2 号、2016、pp.47-63、査読なし

[学会発表](計 1 件)

古壕典洋、通信教育を捉える視座とは - 「へだたり」の再定位、日本通信教育学会第 63 回研究協議会(特別研究発表)、2015 年 10 月 31 日、桜美林大学

[図書]なし

[産業財産権]なし

[その他]

(1)雑誌記事等(計 7 件)

古壕典洋、映画大学生が観るべき 1000 本の映画 part 、日本映画大学だ!、第 4 号、2016、pp.86-87

古壕典洋、ものラボワークショップ in 高山 2015 実施報告、東京大学・株式会社和井田製作所「ものづくりの社会化に関するワークショップ事業」、2016、pp.1-26

古壕典洋、書評 木村元、学校の戦後史、岩波新書、2015、日本通信教育学会研究論集、2015、pp.53-55

古壕典洋、「報告書の構成と共同研究の概要」「呼びかける 呼びかけられる関係」、住民を主役にする公民館 内灘町公民館調査報告 3(学習基盤社会研究・調査モノグラフ) 第 10 号、2015、pp.8-9、pp.97-100

古壕典洋、「身体と音で会話をしよう! ~ドラムサークル講座」、ものづくりを通じた新しいコミュニティのデザイン - MONO - LAB-JAPAN の活動を中心に(学習基盤社会研究・調査モノグラフ) 第 7 号、2014、pp.199-205

古壕典洋、ものラボワークショップ in 高山 2014 実施報告、東京大学・株式会社和井田製作所「ものづくりの社会化に関するワークショップ事業」、2015、pp.1-20

古塚典洋、「報告書の構成について」「公民館主事ワークショップグループ2」「白帆台地区ワークショップグループ4」「鶴ヶ丘北地区ワークショップグループ4」「向粟崎地区ワークショップグループ3」「結び:何が議論され、何がイメージされたのか」、当事者になり続けるということ 内灘町公民館調査報告2(学習基盤社会研究・調査モノグラフ) 第6号、2014、p.7、pp.16-18、pp.39-41、pp.60-63、pp.79-82、pp.93-98、pp.109-115

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

古塚 典洋 (KOBORI, Norihiro)  
東京大学・大学院教育学研究科・助教  
研究者番号: 50735644

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし